

《追悼特集》中村 哲

他の人の行くことを嫌うところへ行け
他の人の嫌がることをなせ

—— 内村鑑三『後世への最大遺物』

構わん、続けよう
誰もが押し寄せる所なら我々が行く必要はない
誰も行かないから、我々がゆくのだ

—— 中村哲『ダラエ・ヌールへの道』



中村 哲 略歴

1946年福岡県生まれ。医師・PMS（平和医療団・日本）総院長。九州大学医学部卒業。九州大学YMCAシニア。日本国内の診療所勤務を経て、84年ペシャワール赴任以後、山岳無医地区での診療活動に従事。2000年以降は医療活動、戦争難民支援に加え、大早魃に見舞われたアフガニスタン国内水源確保の為に井戸掘削と灌漑用水路建設計画を始動。大規模緑地化を実現。画像：『医者、用水路を拓く』より転載。

《追悼特集》中村 哲

中村 哲先生 追悼特集を組むにあたって

2019年12月4日朝、アフガニスタン東部ジャララバード。中村哲先生と運転手を含む現地スタッフ5名が銃撃に倒れ、落命。突然の訃報に多くの人々が言葉を失いました。この追悼特集を組むにあたり、改めてご冥福をお祈りし追悼の意を表します。

大旱魃という天災、戦禍という名の人災に喘ぐアフガニスタンにて30年以上もの間、中村哲先生は人々の病、飢え、渇きの難題に向き合い闘ってこられました。暴力と敵対と不信が支配する世界の最前線で、「天の恵みと人のまごころは信頼に足る」(『天、共に在り』) ことの確信を私たちに伝えて下さいました。私たちは中村哲先生の遺された言葉を胸に、平和とは、豊かさとは、援助とは、いのちとは何かと問い続けつつ、誰もが行かない場所へ、誰もが向き合うことを躊躇う課題へと足を踏み出す勇気を持ちたいと思います。本追悼特集が学生YMCAに連なり、若き日の中村哲先生と歩みを同じくする私たちの勇気の種となることを祈願します。

本追悼特集は二部構成で組まれています。前半では追悼文集の形式をとり、九州大学YMCAの同窓生が語る中村哲先生、ペシャワール会立ち上げ当時の福岡YMCAと中村哲先生、90年代の学生YMCAと中村哲先生、それぞれの交わりの記憶を綴って頂きました。後半では、2006年3月4日に開かれた九州大学YMCA100周年記念会における「平和をつくる」講演を音源から起こし、全文を掲載しました。

あの日あの時代、中村先生は私たちと歩みを共にされ、アフガニスタンと出会い、自身の行くべき地へ発って行かれました。その記憶と記録を通して、中村哲先生のメッセージと生き様を私たちの心に刻みたいと思います。

追悼特集編集担当者 記

※本特集での写真掲載にあたり、福島恭輔様、宮崎信義様、天児都様、志満秀武様、末本正昭様(ペシャワール会)、落合道夫様より写真提供のご協力を頂きました。講演音源の文字起こし作業は現役生の万奕さん、池本さん、田淵さんにご協力頂きました。心より御礼申し上げます。

中村 哲兄を偲ぶ

九州大学 YMCA シニア 宮崎信義

2019年12月4日、中村哲兄がアフガニスタン・カンダハル州ジャララバードで活動に向かう車に同乗中、何者かに銃撃され、腹部・胸部に数ヶ所被弾し落命した。同乗の5人も死亡。35年前からペシャワールでのハンセン氏病診療（日本キリスト教海外医療協力会 JOCS*から派遣）から山岳地帯での診療、軽症となった方々の自立のためのサンダル工場などの設置、初期から現地のスタッフの育成に努めていました。ソ連軍の侵攻やタリバン政権や複雑な部族間の争いから、300万人にも及ぶ難民の生活の場を支援（井戸から用水路）し、現在では65万人の方々が見守られた地で家族と暮らせるようになったと聞きます。そのどこに中村哲君の殉難の原因があるのでしょうか。悲しい、悔しい。涙が出る中で、イエス様の憐れみと受け入れ、そしてご遺族の癒しを祈りました。親しくして頂いた私の娘たちからもメールが寄せられました。その他多くの同級生や知人からもEメールが多数寄せられました。祈祷会でも主のおとりなしを切に祈りました。12月8日には、中村哲医師の遺体が尚子夫人・長女の秋子さんと共に帰国し、12月9日には、衆議院総会で、中村哲兄を追悼し1分間の黙祷が捧げられたと聞きました。多くの方々の尊敬と共感が寄せられたものでしょう。私は、哲君（哲ちゃん）の学生時代から海外医療協力に至る若き日々を知る者として、以下のように追悼の祈りと合わせて覚書を寄稿致します。（JOCS* ; Japan Overseas Christian medical cooperative Service）

哲君は、1946年9月15日、中村勉・秀子の次男として古賀市（当時は町）に出生されました。10年前にも、彼の特集が公開されましたが、昆虫（特に蝶類）採集に没頭していたことや、高校時代から既にフロイト（精神分析）や森田正馬（森田療法）などの精神医学書や、明治のキリスト者である内村鑑三全集を愛読していたこと、これは実家を訪ねて驚きましたが、本当に風貌とはかけ離れた広さと深さを感じました。

古賀の実家は、「ひかり荘」という旅館を営んでいましたが、当時主な御得意さんの製紙工場は閉鎖間近ということで経営は苦しかったのではないかと思います。しかし気丈でやさしいお母さん（1966年に逝去された中村秀子さん）と頑固そうなお父さん（中村勉さん、大戦前からの筋金入りの共産黨員）、強そうなお兄さん（中村透さん）に囲まれたありふれた家庭でした。それとはなく知ったところによると、ご両親は戦前の左翼青年と沖中仕の親分のお嬢さんであったとのこと。その親分は「花と竜」の玉井金五郎で叔父さんが作家の火野葦平ということであった。そのことを彼が全く誇る気配も見せないことと、その構成が彼の人となりに大きく影響を与えたことは想像に難くありません。

彼の実家でも大変お世話になりましたが、親交を深めていくにつれて、彼の思慮深さや精神史に感動しました。

1966年4月に九大医学部に入学(同期)。クラス100人のうち2人がくじ引きで定数2の学友会代議員となり、初めて中村 哲という名前を意識するようになりました。風貌はというと、ばさばさの髪に作業服、くったくのない表情、ただ言うことがやたらと革新的であり、聞けば「民青だ」と言うことでした。私は保守的であったせい(後に変化するが)余り良い印象を受けなかったようです。しかし、クラス討議で議論がまとまらず、お互いに代議員であったこともあり、クラス討議の調整で話し合っていると、なんとお互いにクリスチャンであったことを知りました。その後は、ふりだしに戻って親交を深め、私の下宿や古賀の彼の実家を行き来しました。YMCAでの活動や学生運動も共に行動しました。1961年12月24日、西南学院中学3年時に、香住ヶ丘教会にて洗礼を受けクリスチャンとなったことも聞き、その縁で私も同じ教会に転会致しました。

教養部から専門課程にかけて、当時は数年先の70年安保闘争を意識していましたが、日常的にはベトナム反戦運動や原子力空母エンタープライズの佐世保入港反対運動(九大YMCAから現地へ)、大学二法案反対運動で専門性に埋没することなく、社会にも目を開いていくのが当たり前と受け止められていました。その過程でも彼の言動に一片の浮ついたものを感じませんでした。彼の口癖でもありましたが、「見栄や銜いではなく・・・」「金科玉条ではなく・・・」が口癖であり、つまり真実を重んじ、論評だけの売名行為を軽視し、教条主義とも最も遠い人間であることは間違いのないと思います。この時、同級生で九大YMCAの仲間に故・佐藤雄二君(40代前半の若さで逝去)がいました。彼は後年、中村哲兄の支援団体であるペシャワール会事務局長として働くこととなりました。

九大YMCA(KSCA)では、佐藤雄二君・佐藤誠さん御兄弟は、長く「筑豊の子供を守る会」で地道な活動をしていました。また中村哲君と私は、無医村診療などに参加したいと思っていましたが、残念ながら九大セツルメントや九大仏教青年会が実施しているばかりでした。そこで私たちは突拍子もないことを思いつき九大セツルメントの鹿児島県の無医地区診療に参加致しました。その他のYMCAの活動は、日常の読書会(マックス・ウエーバーなど)が主体でしたが、原子力空母の佐世保寄港に反対する意思表示で九大YMCAから佐世保基地前のデモに参加しました。九州地区大学YMCAの阿蘇夏期学校での滝沢克己先生の講演「インマヌエル」は優しい口調ながらとても内容が深く理解困難でした。しかし、九大YMCAから参加した女子学生が山中に入り消息が分からなくなったために、夏期学校参加者が全員で捜索するというハプニングがありましたが、その学生も見つかり、その後は他学の方々とも気持ちが一致したことは懐かしい

思い出です。『天、共に在り』の素地は、育った家庭や神経症的な苦悩（本人の話）からだけではなく、このような経験からも形成されたのではないのでしょうか。

1968年6月2日22時48分頃、アメリカ空軍のファントム偵察機が、九州大学箱崎地区内で建設中の大型計算機センターの屋上に墜落しました。この時、名島の九大YMCA寮にいた私は、墜落時の轟音を聞き、哲君と共に九大箱崎キャンパスに駆け付けましたが、通路を米兵が固めて私たちは自動小銃を向けられ、恐怖感と共に「日本は独立国なのか」と疑ったほどでした。

また彼の人柄の特徴の一つは、文章の簡潔さと共通して、金銭に対して淡白というか恬淡であり、お互いに貧乏学生でしたが、何か食べようと言うと無造作にポケットからお金を取り出していました。お腹をすかしてもお金がない時は、ある者が出すといった具合でした。文章といえば、彼からの手紙は罫線のない白い紙に一見無造作に書かれたもので、所々に訂正した箇所がありましたが、実に簡潔で自然な文章でした。修辞文のような形容詞の多用や回りくどい表現は一切なく、それでいて美しく射た文章でした。これは、彼の著書を読んだり講演を聴いた方なら気がつかれると思います。

また語学については天性の才があり、受験や単位を取るためというのではなく、その言語を使う人や文化に興味があったのではないかと思います。試験とは関係のないドイツ語会話に興味を持っていたことには驚きましたが、私はしばしば彼の語学の知識に助けられました。この延長線上が、バイリンガルどころかマルチリンガルともいうべき、現在の英語・ウルドゥ語・パシュトゥン語・ペルシャ語などの才に見られます。正に、今日までの35年間に用いられた天賦の才だと思います。

医療についても共通していました。高校時代からフロイトに関心があったようですが、その意志が精神科医を選び、神経内科の専門医を修得させたものです。海外医療協力を携わると、現地の人々の必要（ハンセン氏病や結核～外科処置や救急医学）から、麻酔科・脳外科・実践的な内科学、そしてハンセン氏病診療開始後に日本では過去の技術となりつつあったハンセン病外科（下肢切断）などを海外で研修しています。当時の日本の医学医療は、正しく研修しようとする、大学医局という閉鎖社会かそれに匹敵するような国公立病院や公的大病院に頼らざるを得ず、従属的な人間関係（誇張はあってもいわゆる「白い巨塔」、「象牙の塔」）が形成されていました。彼はしばしば「まだ大学病院にいるの」と私に言ったように、そのような体制に囚われることはありませんでした。その型破りが羨ましく、また患者の必要によって知識や技術を修得するのが医師の真実の姿だと思ったものです。



【写真】1971年頃（25歳頃の哲君）－拙宅を訪問時－

1973年3月に九大医学部を卒業し、国立肥前療養所に勤務されました。1977年頃に私が偶然に出会った福岡登高会会員から「報酬は余り出せないが我々と一緒にヒマラヤに行ってくれるドクターを知らないか」と尋ねられ、「そのような物好きな医者はいないでしょう。いや一人いる。」と言って中村哲君を紹介しました。哲君は当時、国立肥前療養所で精神科医として勤務していましたので、さすがに無理かなとも思いました。

1978年、福岡登高会の同行医師としてヒンズークシ、ヒマラヤのティリチ・ミールへ。その後の経過は彼の著書に詳しく書かれていますが、行程で出会った現地の人々の病気に苦しむ姿と純朴さに心打たれ、再会を約束したとのことでした。

医師の場合、一人前になるためには大学病院などしかるべき医育機関で長期間の研修を必要とし、それが大学医局の封建制に組み込まれたり、偏った専門志向に繋がるという弊害がありました。中村哲君の場合は真逆で、医療を必要とする人間の側のニーズに自分を合わせるといった進路の選択をしていたようで、羨ましい限りでした。内科的な知識・技術が必要であれば大牟田労災病院や徳州会病院へ、麻酔や脳外科が必要であれば久留米大学へ、ハンセン氏病による機能障害や壊死の手術の技術習得のために韓国へといった具合に、人間の思惑ではなく医療本来の必要に応じて学びを進める、実に爽やかな印象を与えられました。それを世間は変わり者と言うわけですが、なるほどこのように当たり前の選択も彼ならではの決断を必要とするものかと改めて思ったものです。

[海外医療協力へ]

国策以外で海外医療協力を行なっている組織は、JOCS しかなかったこともあり、JOCS にワーカーとして働きたいと申し出られました。JOCS では総主事を勤められた塩月賢太郎先生や奈良常五郎先生、先輩ワーカーの岩村昇先生など尊敬する方々がおられ、ペシャワールからアフガニスタンへの道が少しずつ開けていくようでした。派遣支持教会として香住ヶ丘バプテスト教会、そして同教会の「中村哲兄を支える会」が発足し、後のペシャワール会の一角を担いました。ペシャワール会は特定の思想信条や宗教からなるのではなく、中村哲医師の活動に共感し支援するという多様さが大きな力として結集していくことになりました。1979年11月17日に、中村哲君と宮川尚子さんの結婚式が香住ヶ丘バプテスト教会で行われました。お二人は勤務されていた大牟田労災病院で知り合われたわけですが、当時の哲ちゃんはとても嬉しそうにしていました。

その後の歴史は急展開し、1979年12月24日にソ連軍がアフガニスタンに侵攻。1983年4月JOCS 理事会にてJOCS ワーカーとして派遣決定（福岡徳州会病院勤務中）。1983年5月外国語研修のためロンドンへ（3ヶ月間の英語研修）。1983年9月香住ヶ丘バプテスト教会に「中村哲兄を支える会」が発足しました。1984年1月熱帯医学校（リバプール）。そして1984年5月からJOCS 派遣ワーカーとしてペシャワールへ赴任されました。1984年5月6日にペシャワール会総会でより広く支援する会が発足し、教会関係者も喜んでその中に参加致しました。JOCS を基盤とした海外医療協力に教会が果たした役割は必要なものでしたが、ペシャワール会が発足した後は共に支援していく、特定の宗教や信条・主義にとらわれないことは、中村医師の活動を必要とする人々を中心としたより実効性のあるものという哲君の活動と支援を確かなものにしていくことになったと思います。今、思うとペシャワール赴任当時のJOCS は奉仕者を送っても経済援助や物資の支援には強い制約が課せられていました。しかし、アフガン難民の生命を守るという支援に進んでいくと、先進国の主義主張ではなく、命を支える支援が為の水や用水～農地が不可欠なものです。これらの活動の支援は、ペシャワール会が担っていかれました。教会は離れたのではなく、むしろ喜んでペシャワール会に入っていたと思います。発足後のペシャワール会の活動拠点となる事務所も、福岡市中央区大名にあったYMCA 会館（志満秀武総主事）が快く提供して下さり、また活動の便宜も図って下さったようです。YMCA 会館で英語研修を受けておられた方々や熱気球の会の方々など、それこそ「特定の宗教や信条・主義にとらわれない」多くの方が支えて下さったのです。

ペシャワールに赴任後、哲兄は急性肝炎に罹患しました。2クール（8年間）のJOCS

派遣ワーカーの勤めを終え、その後はペシャワール会からの派遣として事業を継続しました。現地の人々の必要に応えるという哲兄の要請に、ペシャワール会は今に至るまで物心両面で支え、そして協働されました。自分の生活は馬場脳外科での非常勤医師として生計をたて、ペシャワールやアフガンでの働きは、ひたすらボランティアに則ったことも、いかにも彼らしい生き方でした。ただハンセン氏病診療だけでなく、靴工場の建設に代表される患者の生き方にも目を向け、薬や医療器具がないからといったことを理由にせず先ず始めるという在り方も実に彼らしいものでした。

1988年5月にソ連軍が撤退開始（1989年2月撤退完了）、1991年にはアフガニスタン北東部の3診療所を基点として山岳無医地区の診療活動を開始し、ALSをJAMS（Japan-Afghan Medical Service）と改名し、アフガニスタン支援を現地の人々と共により積極化していきました。1997年にはハンセン氏病登録患者は6,000名以上（未治療者は20,000名を超えると推定）で、ペシャワールに2ヶ所の病院、パキスタン～アフガニスタンに5ヶ所の診療所に対応し、現地職員は150名以上に達すると帰国報告会で伺いました。1998年4月にペシャワールにPMS=Peshawar Medical Service（70床、建坪1000坪）を建設し、これには日本の市民から3,500万円の援助（資金の70%）があったとのことです。

2001年からカーブルに臨時診療所設立。2001年9月11日米国で同時多発テロ発生し、タリバン・アルカイダへの制裁という理由で広範囲の爆撃がありました。ソ連侵攻～内戦～国連（米国による）報復で約200万人の死者と600万人の難民が生じたとも報告されました。

彼の立ち位置は学生時代から変わらないと思ったのは、医療活動にとどまらず、被害者ともいえる難民の方々の生活をも支えることに何の矛盾も感じず、実践していったことです。しかも現地の人々や日本からの支援、伝統的な治水技術の活用など、医療の方法論とも一致しています。2001年からアフガニスタン国内に井戸（1,400ヶ所以上、目標2,000本）掘削、水路建設など、現在は用水路によって約65万人が帰還できているとのことです。具体的な活動については、他の証言者や著書をお勧めします。

2002年12月27日に10歳という若さでご次男が脳腫瘍で亡くなられた苦難の時もアフガニスタン支援を続けておられた哲兄が2019年12月4日に凶弾を受け死亡したことの意味は、「神様、なぜこのようなことが起こるのですか」と問いつつ、彼の止むに止まれない心情を現わしているのかと悲嘆のうちに思いました。今はただ、ご家族の慰めと癒し、御国での再会を祈ります。

中村 哲さんの意志を置かれた場で継承していきたい！

～ペシャワール会発足時とYMCAの関わり～

志満秀武（熊本大学 YMCA 花陵会シニア、元・福岡 YMCA 総主事）

12月4日(水)中村 哲さんが凶弾により命をおとされたとのテレビニュースに言葉を失った。「なんということか」徐々に詳細が明かになるにつれ私は祈ることしかできなかった。中村 哲さんのこと、尚子夫人はじめご家族のこと、ペシャワール会の役員の方々のこと、ボランティアで働きをなされている方々のことを覚え祈った。現場の第一線で心血を注ぎ、しかしいつもユーモアをもってアフガニスタンの人々のためにアフガニスタンの人々と共に働き続けた中村さんがこのようなかたちで命を落とすことになったことに悲しみと悔しさを抑えることができない。中村さんにはなお、壮大な計画となすべき働きがあったと思われる。「主なる神様、中村 哲さんにあなたの御許で大なる祝福を与え平安を与えて下さい。尚子夫人はじめご家族のお1人お1人に慰めと力を与えて下さい、中村さんを守るために働き命を落とされた5人のアフガニスタンの方々、そのご家族の上に慰めと力を与えて下さい。」心から祈ります。

中村 哲さんの葬儀において香住ヶ丘バプテスト教会名誉牧師の藤井健児先生は中村さんの追悼の辞の最後に讃美歌 412 番を讃美された。「昔主イエスの蒔きたまいし、いとも小さきいのちの種。芽生え育ちて地の果てまで、その枝を張る樹とはなりぬ」私は共に讃美した。会場で讃美する声が聞こえてきた。

福岡市中央区大名大村ビルにあった福岡 YMCA 一室は水曜日の夜は活気に溢れていた。中村さんを囲むペシャワール会事務局メンバーが集い、会の活動のこと、会員の拡大のこと、会報編集のこと等熱く語り作業に取り組んだ。小さな種がここで蒔かれてとてつもなく大きな実となった。以下、会発足時と YMCA の関わりについて紹介したい。

1983 年春、大名の YMCA に九州大学 YMCA の OB 佐藤 誠さんと弟の佐藤 雄二さん、中村 哲さんが私を訪ねてきた。佐藤 誠さんより九大学 Y 時の友人中村 哲さんが JOCS を通しパキスタン ペシャワールへ派遣されるのでその支援組織を立ち上げるので福岡 YMCA も協力してほしい。ついてはその準備の事務局を福岡 YMCA の中に置かせてほしいとのことであった。当時の福岡 YMCA は全国 YMCA の多大な協力を得て新たな歩みを開始した直後であり活動・事業共に大きな進展があり各部屋もフル稼働の状況であった。

佐藤 誠さんとは学 Y 時代「筑豊の子供を守る会」で共に活動をした仲間であり、お会いした雄二さんの誠実な人柄、中村さんの穏やかな中にも熱く語るアジアへの思いに同じYMCAに連なる仲間として共感をもった。活動が主として夜間であるとのことで、当時の小林省三総主事とも相談し福岡 YMCA としてもその運動の一翼を担うかたちで申し出を受け入れたのである。



中央区大名にあった福岡 YMCA 大村ビル (1983 年頃)



ペシャワール会、福岡 YMCA 祭にて (1985 年頃)
前列中央に中村哲さん、左隣に佐藤雄二さん、前列右端に筆者

中村 哲さんの飾らない人柄、アジアに寄せる思い、とりわけ困難な中にある人々、劣悪な医療環境にあるパキスタンのハンセン氏病の人々へ医師として少しでも貢献し

たいとの熱い思いは私たちの心を揺さぶるものであった。爾来、大村ビルが契約満了で天神三和ビルに移転後の1989年8月5日までペシャワール会の事務局は福岡YMCAの中にあった。ペシャワール会発足時のYMCAとの関係をみると極めて興味深い。中村哲さんをJOCSで支えその志に深い理解を示したJOCS総主事の奈良常五郎さんは元大阪YMCAの総主事でありその後同じくJOCSの総主事となった塩月賢太郎さんは元日本YMCA同盟総主事である。特に塩月さんは同盟では学生YMCAの主事として全国の学生YMCAの指導に尽力され世界のYMCA運動に多大な貢献をされた方であった。当時会の事務局長であった佐藤雄二さんが若くして天に召された後、塩月さんは自宅を弔問されご夫人に雄二さんのペシャワール会での働きに感謝を述べられた。奈良さん、塩月さん共に中村さんの働きに注目され大きな期待を寄せられていた。中村哲さんも奈良さん、塩月さんには深い信頼を寄せていた。

一方、福岡での活動の中核を担ったのは佐藤兄弟をはじめ九州大学YMCA関係者、香住ヶ丘バプテスト教会を中心とするバプテスト教会の牧師と教会員、福岡YMCAでは理事の間田直幹先生(後ペシャワール会会長)、「アジアを考える会」のメンバー、「ESS(英会話グループ)」のメンバー等であった。とりわけ毎月開催していた「アジアを考える会」は杉山龍丸さん(作家 夢野久作のご長男でインドの砂漠緑化に生涯をかけられた)や内田義弘さん(JICAの農業指導専門家で中南米をはじめ中近東で長年働かれた)の指導で多くの個性的な青年が集っていた。毎日新聞福岡総局の加藤暁子記者(その後海外特派員として活躍している)もよく参加していた。青年海外協力隊OB、海外医療に関心をもつ九大、福大の医学部の学生等々が例会には集っていた。中村哲さんからこれらのメンバーにお話をすると中村さんの人柄と熱い思いに魅かれ多くの会員がボランティアとして喜んで協力を申し出た。1983年5月にペシャワール会発会第1回準備会、同年9月18日に正式にペシャワール会の発会式(会長間田直幹)が開催された。この間、毎週水曜日の夜に事務局会が開かれ上記の多くの賛同者が集い中村哲さんからの報告を聞き(海外からのレポートを含む)、活動計画を検討し、会員募集の方策検討や会報作成・発送等に励んだ。真剣な協議の中にもいつも笑いが溢れ実に楽しい時間を共有できた。21時30分頃に終了後はYMCA近くの居酒屋「一宝軒」に毎回繰り出しほぼ1時間は飲み食い。メンバー相互の交流を深める良き機会でもあった。中村哲さんはいつもこの場の中心にありとつとつと語る語り口。「楽しく長くやってみましょう」が口癖であった。実に愉快的な時が与えられた。

なお、お母さんの中村秀子さんもよくYMCAを訪ねてこられていた。きまって饅頭をお持ちになり「哲がいつもお世話になっています。どうぞよろしく願います。皆

さんで召し上がって下さい」この言葉を添えて帰って行かれていた。何度、何十回この饅頭とお礼の言葉をいただいた事か。小柄なお母さんの姿は中村 哲さんとダブッて見えた。お母さんが中国との関係で大事な働きをされていたことを後日知らされた。とても腰の低いお母さんであった。

中村 哲さんの働きは多くの福岡 YMCA の会員の中に今も生きて働いている。同時に全国の YMCA (学生 YMCA、都市 YMCA) に連なる者の心に深く刻まれている。中村 哲さんはイエス・キリストの福音に支えられイエス・キリストに倣って生涯その活動が続けられた。私たちもその置かれた場で中村さんに続く者でありたいと願っている。中村 哲さんありがとう。ご家族の皆様にも主の慰めと癒しがそそがれるよう切に祈ります。

中村 哲という生き方

九州大学 YMCA シニア 伊原 幹治

中村哲さんのことを話す前に、佐藤雄二さんについて、ひとこと語りたい。中村さんが、JOCS(キリスト教海外医療協力会)からパキスタンに派遣されることになった時に、彼を福岡で応援するために1983年に結成されたのが「ペシャワール会」であった。その初代事務局長になったのが佐藤さんで、お二人は医学部の同期生であり、九大YMCAのメンバーでもあった。しかし、佐藤さんは間もなくガンを発症して亡くなられた。佐藤さんが生きてたおられたら、もっと深い関わりを、私も九大Yはしていたと思う。

その中村さんであるが、彼はパキスタンの北西辺境州ペシャワールにあるミッション・ホスピタルに勤務した。私が彼の仕事で注目した最初は、彼がサンダルを作った時であった。当時、中村さんの患者はハンセン病患者で、彼らは手足の末梢神経が侵されていた。そのため、道に落ちていた釘のような物を踏み抜いても痛さを感じないそうで、足の甲にまで釘が突き出ているのに気がつかず、山を越えて病院まで歩いて来た人があったという。そこで、中村さんが考えたのが、古タイヤで作った頑丈なサンダルであった。材料はどこにもあり、安価だというのである。私は、この話を聞いた時に、「おやっ」と思った。それは、医師は病院に来た患者の病気を治すのが仕事であるが、中村さんの発想はもっと広がりを持っており、「何か違う」と、その時直感的に思ったのを覚えている。

その後、彼はJOCSから離れて、より自由に活動を始め、支援組織も「ペシャワール会」一本になった。彼は、病院の外に出て、患者を探す活動を始めた。車が通れない山道を何日もかけて歩いて村を訪れ、雪が降る山の奥地まで行き、最終的にはそこに診療所を何カ所も作ったのであった。

この中村さんの仕事が大きく転換したのは、ソ連のアフガニスタン侵攻による大量の難民の発生と、2000年の大旱魃の深刻化であった。そして、彼の目は病気よりも人々の生活支援に注がれた。そのための食糧支援と井戸掘りであった。それ以降のことについては、語る必要はないだろう。

中村さんの、「武器を取る者は取れ。私たちはクワで平和を実現しよう」という言葉には、イザヤ書2章の「劔を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」という言葉が、「なぜ、わざわざ危険な地域に行くのか」と講演会で問われると、「道で倒れた人を見たら『大丈夫か』と駆け寄るでしょう。それが人間共通の心だと思う」という言葉には、ルカ10章の「善きサマリヤ人」の話が、そして、『天、共に在り』という言葉に

は、「インマヌエル」の言葉がそれぞれ重なる。聖書の言葉が、彼の中で生きていたからこそ、イスラムの人々の友人になれたのではないだろうか。彼は西南学院中学校2年生の時、藤井健児牧師の日本バプテスト連盟香住ヶ丘教会でバプテスマを受けている。そして、医学部への進学を決定した。

用水路の建設が軌道に乗ったころ、数学などの教科書を詰め込んだカバンを持ち歩くようになったという。彼は、用水路、モスクやマドラサ（学校）などを独学で設計し、建設したのである。高校で習った三角法が役に立ったと言っていた。そして、住民から「ドクターサーブ」と最上級の尊称で呼ばれた。

中村さんが私の勤務先に話に来られた時に、事務局の福元満治さんに聞いたことがある。「中村さんはなかなかの達筆ですね」と。福元さんは出版業なので、彼が中村さんに本をかけと言ったのかと思ったのである。ところが、福元さん曰く。「いや、そうではなく、彼が勝手に書いて持ってくるのです」と。なるほど、私は納得した。芥川賞作家の火野葦平は母方の伯父であり、若松を舞台にした『花と竜』の主人公は祖父玉井金五郎がモデルである。火野からは文才を、祖父からは「誰もが行かないからこそ行く」という義侠心を受け継いだ。

私が校長職をしていた時に、学校に新聞社から電話が入り、中村さんのことについていろいろ聞かれたことがあった。ひょっとしたら、ノーベル賞かなと期待したが、受賞はならなかった。しかし、それ以降、毎年この季節になると期待するようになった。結果的に、アフガニスタン政府も私たちも、彼の命を守ることができなかった。もし彼がノーベル賞を受賞していたら違った結論になったのではないかと今でも思っている。それは、マララさんを襲撃した犯人たちも、この賞の受賞者に手を出すことはできていないからだ。

何度、彼の話聞いたかわからないが、いつ聞いても同じ話であった。飾らず、ボソボソと語る口調には誠実さが溢れていた。趣味は登山と昆虫の観察。彼の骨は分骨され、アフガニスタンにも眠るという。

中村哲さんを偲ぶ

九州大学 YMCA シニア 豊永義典

2019年12月4日、自宅でパソコンに向い作業している時に、学Y時代からの仲間のN氏から「中村哲さんがアフガニスタンで銃撃を受けて亡くなったことを知っているか」とのメールがはいった。すぐにインターネットを見たら、そのことが目に飛び込んできた。35年間「天」の守りのもとで、現地の方々と、現地の方々の目線で、ともに作業を続けてこられた中村さんがこのような形で命を落とすことになったのかと、くやしさと悲しさのなかで、しばらく記事を読み続けました。

私は中村さんより2年後輩で、教養部から工学部に移った段階で九大YMCA会館に入ったことから、会館で中村さんを見かけたりすることはありましたが、何かの集まりでじっくり話したりという記憶はほとんどなく、当時会館ではしょっちゅうどこかの部屋で宴会をやっていましたが、酒を飲みながらゆっくり語り合ったということもあまり覚えてはいません。

私にとっては、そのようなお付き合いではあったけれども、学生時代に、それも学生YMCAの活動を通して中村哲さんを知り、その後自分は企業に勤め仕事をしながら生きていくなかで、中村さんがアフガニスタンで医療活動から始まり、井戸を掘ったり、水路を作るということをされていることを会報や書籍や講演会で知るということは、このような先輩を持ったというある意味誇りでもあったし、私自身が生きていくうえでの大きな指針になってきました。

私は所属する教会の全国組織である日本バプテスト連盟全国壮年会連合の働きを通して、全国の壮年の方々とのおつきあいを続けています。この会では毎年13の地方連合が持ち回りで全国壮年大会を担当し、その年の主題を決め、講師を決めて学びを行なっていますが、2010年に北海道地方連合が担当の時に、札幌教会で中村哲さんを主題講師とし、「人は愛するに足る」と題して講演をして頂きました。

その時点までアフガニスタンでやってこられたこと、やっておられることの紹介がほとんどでしたが、最後に聖書に出てくる言葉を引用して、以下のように思いを語られました。

- 2010年2月に用水路建設が終り、6月に砂漠で田んぼが始まった。砂漠が緑の農地に変わった。詩篇23編（「主は羊飼いな…」）が目の前に現出したのである。
- 財産を多くするにしたがって守るべきものが多くなる。それに従ってなお一層悩みが多くなるのではないか。「お金持ちが救われるよりも、ラクダが針の穴を通るほ

うが易しい」というたとえ話は、その通りに思える。

—「良きサマリヤ人のたとえ」が示すように、私達はできる範囲で、隣人のために働いてきたのである。

「3度のご飯が食べられて、家族と一緒に穏やかに暮らせること」が人の幸せであり、この幸せを一人でも多くのアフガニスタンに住む人たちが取り戻せるように、と願いながら働かれた中村哲さんが語られる言葉は、皆さんもそう思われていると思いますが、非常にわかりやすく説得力のあるものです。今回この文章を書くに当たって、これまでに読んだ中村さんの本を読み返し、線を引いている箇所の言葉は、今読んでもそうだなと思いますし、あらためてそのことを自分の歩みのなかで、具体的に行動に表していきたいと思われています。著書『天、共に在り』のなかで「戦争と平和」「不易と流行」の見出しで書かれている次のような文章があります。

- ・アフガニスタンの実体験において確信できることがあるとして、「武力によってこの身が守られたことはなかった。」「私たちが地元の人々に何を求められているのかを汲みとり、人々の心情を察し、信頼感を得て行動する限り、武器は無用である。」
- ・利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが、人の心に触れるのである。平和とは理念ではなく、現実の力なのである。
- ・何が真実で何が不要なのか、何が人として最低限共有できるものなのか、目を凝らして見つめ、健全な感性と自然との関係を回復すること。「王様は裸だ」と叫んだ者は、見栄や先入観、利害関係から自由な子供であった。それを次世代に期待する。

葬儀のなかで親族のお一人である玉井史太郎さんが語られたという「正しいものは最後は勝つという正義感をそのままに、人間としての美しい気質を受け継いでいた」という言葉が胸に残った。

「…への自由」

ガラテヤの信徒への手紙 5章 13節-14節

九州大学 YMCA シニア 齊藤 皓彦

この追悼文は 2019 年 12 月 8 日日本基督教団西福岡教会の日曜礼拝における齊藤先生の説教を元としています。齊藤先生の許可を頂き追悼文として掲載させていただきます（編集者注）。

今日は、アドベントの第二週です。蝋燭が二本立てられました。イエス様の誕生を憶える日が、また一週間近づきました。このアドベントの時に、先週の 4 日に、突然中村哲さんの訃報が入ってきました。中村哲さんについては私自身個人的にも知り合いましたし、一昨年 9 月から 11 月まで 3 か月にわたって、教会主催の DVD 上映会とボランティアの方々のお話を伺う特別集会を開催しましたので、特別に大きな驚きでした。

教会の何人かの方からのお知らせとお悔やみや、友人からの驚きと無念だとの知らせ、また YMCA から多くの方からの悲しみの知らせが私の元に届きました。これだけ多くの方からの知らせが届いたのは本当に初めてのことのような気がします。私達は、3 回にわたる DVD 上映会を通してご一緒に中村哲さんの活動を見てきましたし、ペシャワール会の会員となって会の活動を支えて来られた方もおられますので、今日は礼拝の中で、中村哲さんの活動を振り返り、その言葉を味わって追悼したいと思います。

中村哲さんは、私より 2 歳年下の生まれですが、私が中村哲さんに始めてお会いしたのは、九州大学 YMCA の名島寮に入っていたときでした。特に鮮明に覚えていますのは、1968 年に米国の世界初の原子力航空母艦エンタープライズが佐世保に寄港したときに、白いヘルメットをかぶって寄港反対のデモに出かけられ、その時に YMCA の名島寮に来られて懇談したときでした。一緒ではありませんでしたが、私も佐世保に出かけて寄港反対デモに加わりました。中村哲さんとは、その後 YMCA 関係で時折お会いしましたが、いつも現在の久山療育園の理事長をしておられる宮崎信義さんと一緒に行動しておられました。

その後、中村哲さんとお会いする機会はあまりありませんでしたが、私が初めてケニアに行った年でしたのでよく憶えています。1984 年に中村哲さんはハンセン病の治療のために、パキスタンのペシャワールの病院に赴任され、ハンセン病を中心とした貧しい人達の診療に携われました。その前年に福岡市で「ペシャワール会」が発足します。会長は中村哲さんの友人であった故・佐藤雄二医師でした。佐藤さんは私の親しい友人でもありましたが、癌で帰らぬ人となりました。そんな動きを私は鳥取の地で聞いてい

ました。

ペシャワールに赴任された中村哲さんはその後、隣国アフガニスタン戦争による難民のための医療事業を開始され、最も困難で医療事情の劣悪な最貧の地に住む人々のための医療活動を継続されます。その活動は、目の前に治療を必要として求めている人がいる、という理由でした。しかもそれは、あまりに困難過ぎる医療活動のため、西欧の NGO も国連も手を出そうとしない、命がけの活動でもありました。中村哲医師は、そこに乗り込んで、こう言われます。「誰もが押し寄せる所なら我々が行く必要は無い。誰も行かないから、我々は行くのだ」と。目の前で苦しむ人から、真剣に求められたときに、誰も行こうとしない場所に赴いて診療活動を続けたのです。「目の前で苦しんでいる人がいれば」という言葉が哲さんの全ての活動を貫いています。今回中村哲さんの本をあこれ読みなおし、改めてその活動のすごさ、スケールの大きさ多様さに驚かされました。中村哲さんがどんな具体的な活動状況の中で、どういう想いを抱き、どういう決断や覚悟をされたかを知るには、この機会にどれでもいいですから一冊でも本を読んでいただきたいと思います。本当に宝物になるような感動する場面と言葉に出会えます。

今日の聖書の言葉を見てみましょう。今日の聖書の箇所は先週と一緒です。一緒にしたのは訳があります。ここには二つの自由が書いてあります。先週は一つの自由しか語る時間がありませんでした。「私達を束縛しているものからの自由」即ち「…からの自由」についてお話ししました。パウロは「あなたがたは、自由を得るために召し出された」と述べています。ところがその後「ただ、この自由を、肉によって動く機会とせず愛によって互いに仕えなさい」という言葉が続いています。自由にされていたら、何をしてもいいということではないということです。

先週紹介したルターの「キリスト者の自由」という本の冒頭はこう書き始められています。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも服さない。キリスト者はすべての者に仕える僕であって、だれにでも服する」。つまり、キリスト者は「すべてのものの上に立つ自由な主人であって、同時にすべてのものに仕える僕である」ということになります。相反する命題が同時になりたつのがキリスト者の自由なのです。

ルターが「自由」というとき、それは「…からの自由」（悪魔と罪からの自由、律法からの自由）であると同時に、「…への自由」も意味しています。今日の聖書には「この自由を、肉によって動く機会とせず愛によって互いに仕えなさい」とあります。愛に向かって自由を行使することがイエス様が示してくださった本当の自由なのだと言っているのです。「愛への自由」です。律法とか束縛から自由にされた者は、愛へと踏み出して

いく自由に生きる者になりなさいと勧められています。14 節には「律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によってまっとうされるからです」とあります。3 つの福音書に書かれているようにイエス様が、『心を尽くし、精神を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』これが最も重要な第 1 の掟である。第 2 も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』とされています。また、マタイによる福音書 10 章で「私の弟子だという理由で、この小さい者の一人に冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」とされています。イエス様の言われる自由とは「愛に向かう自由」「愛への自由」です。

1984 年の中村哲さんのパキスタンのペシャワール赴任後、ここで述べましたようなすさまじい命がけの努力と支援活動の果てに、あのような悲劇に見舞われるとは、悲しくて腹立たしくてやりきれません。でも、彼の著書の題名の通り「人は愛するに足り、真心は信ずるに足る」を生き切った人だと改めて深く教えられました。それは確かにイエス様の語られた通りの「愛への自由」に生きた人だと思わされます。そして、それが彼が大事だと言っている「よい信頼関係をつくること」であり、「信頼関係に向かう自由」「信頼関係への自由」を生み出しているのだと思います。報復ではなく、よい信頼関係を作っていく「愛への自由」を私達も学びたいと思います。それは冷たい水一杯から始まります。

中村 哲さんと名島寮の再開

九州大学 YMCA シニア 落合道夫

1991年7月に九州大学 YMCA 名島寮が再開したとき私は大学院生で、再開後第1期の寮生となりました。再開に至るまでには数年間にわたる理事会、OB・OG会、現役学生を取組がありました。現役学生でそれを中心的に担われたのは故・山田信^{ゆき}さんでしたが、5歳後輩の私も山田さんの後にくっつきながらいろいろな準備をし、いろいろな人と会いました。振り返って思うことは、名島寮の再開は多くの人の祈りや願いや努力によって実現したという事実です。その中に、九州大学 YMCA に所属していた中村哲さんの影響もあったと私は感じています。1990年代初め頃すでにペシャワールでお働きになっていた中村哲さんは、実際的に名島寮の再開に関わられた訳ではないのですが、その存在は、間接的にではありますが大きな役割を果たして下さいました。そのことを書かせていただきます。

名島寮は1957年に創設され1972年に閉寮。その後は某企業の寮として利用されてきました。私たち現役学生の活動の拠点として名島寮を再開したいとの機運が高まってきたのは1988年頃だったと思います。

中村哲さんは1984年ペシャワールに赴任、同年ペシャワール会が発足されましたので、その活動は当時の私たちの耳にするところとなりました。先輩のご活躍をもっと知ろうと1990年6月に中村哲さんをお招きして九州大学六本松キャンパスで講演会を開催しました。100人入る教室が学生でほぼ満席になったと記憶しています。また、同年8月の九州地区学生 YMCA/YWCA 夏期学校^(注)の講師としてもお招きしました。「危険な関係ー日本とアジアー」をテーマに YMCA 阿蘇キャンプ場に40名ほどの学生(九州大学、熊本大学、長崎大学、活水女子大学ほか)が集いました。参加した学生による記録には次のようにあります。「隣人とは誰か」という深い問いを得たという感想です。

…(それは)おそらく(中村哲さんがペシャワールで)自分の隣人を見つけることができたからでしょう。今のところ、私は自分の隣人が誰なのか全く分かりません。いえ、多分分かろうとしていないと言った方が正しいと思います。しかしやはり探して行きたいと思うのです。…

これらの講演会・夏期学校に中村哲さんを講師として招く際の仲介をして下さったのが、故・佐藤雄二さん(当時ペシャワール会事務局長、九州大学 YMCA 名島寮シニア)

でした。はじめはそのようなことだったのですが、寮の再開を目指しているのと同時期でしたので、このことでもいろいろと相談にのっていただき、九州大学YMCAの理事にもなっていただきました。ご自宅に招いて下さってお食事をいただきながらお話をさせてもらったのも1度や2度ではありません。再開までのプランや自らの名島寮体験に基づいた再開後の寮の構想についてアドバイスをして下さいました。名島寮再開に向けた若手OB・OG会（1990年8月5日、箱崎の「やかた寿司」にて）を開くことができたのも佐藤雄二さんが周りにずいぶんと声をかけて下さったおかげでした。10人以上集まって下さったOB・OGは、中村哲さん、佐藤雄二さんと同世代の方々と、遠くは関東地方からも駆けつけて下さいました。会での話題は名島寮再開のことと並んで、中村哲さんやペシャワール会の活動のことでした。この会を機に名島寮再開への動きが一気に進んだと思います。



九大YMCA名島寮再開に向けた若手OB・OG会1990年8月5日

中列中央に佐藤雄二さん、後列右から3人目に山田信さん

佐藤雄二さんのガンが見つかったのは、そんな最中でした。1年くらい闘病なされ、結局、寮再開直後の1991年12月9日にお亡くなりになりました。11月の寮再開記念会には出席したいということをしていましたが叶いませんでした。私は再開した寮で生活しながら寮の理念を模索する中で、生前の佐藤雄二さんのお話しになっていたことを振り返ることが何度もありました。もし佐藤雄二さんがご存命だったなら再開後の名島寮の理念はきっと違ったものになっていたはずです。

全く同じことが山田信さんにも言えて、九州大学移転に伴う寮移転のことを一番望み

つつ心配しつつも、新しい寮（一麦寮）の完成（2017年4月）を目にすることなくやはりガンで2015年12月9日にお亡くなりになりました。山田信さんをご存命だったなら一麦寮の理念はきっと今とは違ったものになったはずです。

前述の1990年6月の六本松キャンパスでの講演会后、近くの「もつ鍋・三蔵」において参加者で中村哲さんを囲み懇親会を開きました。そこでは講演とは違い、参加者一人一人、中村哲さんとざっくばらんなお話をさせてもらいました。そこで中村哲さんから言われた忘れえない言葉があります。「落合くん。学生時代って大切だよ。学生時代やっていたこと考えていたことっていうのは、その後もそのままその方向で行くものです。多くの人見てると大体そう思います。」それはご自身のペシャワールでの活動の基礎が学生時代、すなわちこの学生YMCAでの活動にあった、だから君も今を大切にしてください、ということをおっしゃったのではないかと思います。

佐藤雄二さん、山田信さん、そして今回、中村哲さんを天に送りました。九州大学YMCA・名島寮・一麦寮がこのような優れた先輩たちの命のリレーによって存立していることを改めて心に刻むとともに、残された者はそのバトンを大切に受け継いでいかななくてはいけないと思わされる次第です。

(注) 1967年に阿蘇ルーテル山荘で開催された「九州学生YM・WCA連盟第16回夏期学校」には当時学生だった中村哲さんも参加されたことが、熊本大学YMCA花陵会所蔵の報告書に記載されている。テーマは「イエスと私」。講師は滝沢克己。

九州大学 YMCA 100 周年記念講演 「平和をつくる」

中村 哲

皆さん、こんにちは。私は学生時代は学Yの会員の1人でして、今日は懐かしい顔に色々巡り会って、同窓会にでも出席したような楽しい気分しております。それと同時に、若い方々も多いので、この集まりを通して、また新しいエネルギーが生まれてきたらいいなという気持ちで、私も参加させていただきました。題は「平和をつくる」ということですけれども、5、6年前から、その前からもそうだったんでしょうけども、世の中だんだんきな臭くなってきまして、平和、平和と言ったって、なんとなくみんな危ない方に流れていくという中で、私たちが果たす役割は何なのか、そして私たちは平和をつくるためにはどうしたらいいのか、ということを考える材料にさせていただけたらと思います。100周年ということで、そうなればなるほど、考え方が融通が効かなくなるんですけども、つい最近の若いもんはと言いがちになりますけれども、100周年を契機に若々しくなって、元のような活発な、今でも活発でしょうけれども、もっと活発な学生のYMCAの活動が展開されることを祈っております。

私の話は、金太郎飴のような話で、何遍もお聴きになられた方もいると思いますけれども、この数年間特にアフガニスタンで、何が今起きつつあるのか、何が起きたのか、皆さんおそらくご存知ない話も混じえて、会の歴史二十数年を紹介させていただきたいと思います。《映像上映》



3年前の映像ですけれども、仕事そのものはですね、ほとんど変わらず続けられています。今日初めておいでになった方はちょっと手をあげてください。半分くらいおられますので、2回目以降の方は退屈かもしれませんが、簡単に私たちの会の発足からいままでの働きを紹介したいと思います。

名前の通り、ペシャワール会というのは、パキスタンの北部にありますペシャワールという、アフガニスタンとパキスタンの国境の街を拠点といたしまして、両国にまたがって活動を続けております。いくつかですね、皆さんに知っておいていただきたい、私たちの活動を理解する上で大切な点をあげますと、なぜ私たちが国境をまたがらざるを得ないかということで、何も国際貢献ということじゃなくて、この地域アフガニスタン東部とパキスタンの北西辺境州はほとんど同じ、関東と関西の違いしかないということです。アフガニスタンの人々は、首都カーブルを上之都、北西辺境州のペシャワールを下之都とよんで、ほとんど区別なく自由に往来をしている地域です。この地域一帯に住む多数派民族はパシュトゥン民族と呼ばれる、2,000万人以上の民族であります、その半分ずつが国境に分かれて住んでいます。ペシャワール周辺の事情と言うのは、これは日本人にはわかりにくいと思いますが、実態は、乱暴な割り切り方をすると、アフガニスタンの一部ですけれども、行政上はパキスタンに組み込まれておるといふ、微妙な政治的な位置にありまして、私たちの活動は現地事情に沿って、両国にまたがらざるを得ないという訳でございます。

根幹となるのは医療事業でありまして、これは現在でも継続されておりますが、皆さん忘れられておるのでご存知ないかと思いますが、現在アフガニスタンにおける軍事活動はますます拡大しています。私たちの大事な診療所でありました、2つの奥地の診療所、ワマ・ヌーリスタンの診療所とダラエ・ピーチという山奥の診療所は米軍の軍事作戦地域になりまして、撤退を余儀なくされる事態に陥りました。新聞など見ていると、いかにもアフガニスタンは民主化されて、落ち着いたというような印象を与えますけれども、これはまったくの錯覚であると、私は断言したいと思います。その証拠に、空爆中でさえ自由に行けたのに、昨年の中頃から2つの診療所を放棄しなければならないほど、軍事活動が拡大したというのはまだ知らされていないと思います。ともかく、私たちの活動は医療活動を根幹といたしまして、これに携わる従業員は百数十人、さらに水源確保事業、これも後で話しますけれども、これが百数十名、その作業員、臨時作業員も含めると一千名くらい、私たちと一緒に仕事を続けております。

案外知られていないのは、アフガニスタンは山の国だということです。東のヒラヤマからずっとカラコルムに続きまして、世界の屋根の西側を作っているのはこのヒンドゥ

クシュ山脈でありまして、最高峰は7,708メートル、ティリチミールという山ですけれども、非常に雄大な眺めですけれども、アフガニスタンはほとんどこのヒンドゥクシュ山脈で占められている山の国だということは、案外知られていない。だから、アフガニスタンの特殊の事情というのは、まずこういう地理的な条件でありまして、谷と谷が深いので、地域と地域がカットされやすい、悪く言えばまとまりがない。別の見方をすれば、地域共同体は非常に強固でして、日本や欧米諸国のような国民国家は現地では誕生しようがない、という社会でございます。どうやってアフガニスタンという国が成り立っているのかといいますと、谷と谷、谷ごとに国があると言ってもいい。各地域の自治会に似ております長老会というのがあります。これは地域のもめ事から裁判まで、一切合切自分で統治する。文字通り、自治体の集合体がアフガニスタンと考えて差し支えない。この事情がよく伝えられない。日本に伝わってくるのは、首都カーブルだけの様子でありまして、学校が建ちました、病院が建ちました、教育が普及しましたというニュースばかり耳にしますけれども、皆がご覧になっているアフガニスタンの映像というのは、アフガニスタンの中でも非常に特殊中の特殊な場所である。まずはこれを知っていただきと思います。また、アフガニスタンの人口二千数百万人のうち、9割近くが農民及び遊牧民であるということ。現地の有名なことわざに、「アフガニスタンでは金がなくても食っていけるけども、雪がなくては食っていけない」。金がなくても食っていけるというのは、自給自足の村落共同体の割合がほとんどであるということ。ちなみに、アフガニスタンの食料自給率は、干ばつ以前の農村でほぼ100%近く自給自足ができた。日本の食料自給率とはずいぶん違う。つまり金はないけども、決して貧しいところではなかった。しかし、あの乾燥した中央アジアで、二千数百万の人々がどうやって食っていけるのかというと、まさに農民を養っているのはこの白い雪でありまして、冬に降り積もった雪、何万年もかけて作った氷河が夏に溶け出して、川沿いに豊かな実りを約束してくれると。何千年か何万年かわかりませんが、人も動物も植物もこうやって命をつないできた。ということで、アフガニスタンにとって、この山の雪というのは非常に大切なものなんですね。それがこの十数年、年々雪がだんだん薄くなってきている。それは地元の人にとって、戦争以上に恐るべきことであって、このまま放置すれば、20年を待たずして、アフガニスタンの半分の人口が生存できる空間が消失してしまうのではないかと、言われています。これについてはあまり触れられていないですね。これも頭において話を聞いていただきたいと思います。

国民の100%近くはイスラム教徒でありまして、もっとも古典的なイスラム教徒ですね。最近イスラム教と言いますと、原理主義だのなんだのという話が多いですね、何か

イスラムというものに対して、偏見をお持ちかもしれないですけども、現地に行きますと、そのへんを歩いているおじさん、おばさんとちっとも変わりません。日本人の方が怖いですね。私もキリスト教徒のはしくれでありますけれども、何か地元の人にとって大切なことがありますと、金曜日にモスクにいて、話をして、このハンセン病の患者がいじめられたりすると、訴えるということが出来るんですね。私は堂々とクリスチャンだと言いますけれども、それでもって白い目で見られることはほとんどありません。ともかく各地域にはモスクがあって、先ほどアフガニスタンというのは谷ごとに国があると言ってもいいと言いましたけども、いろんな民族そして部族から成り立っているアフガニスタンを結びつけるのは、このイスラム教であります。これを連動した長老会というのは、自治体の要になってその地域を支配していると。その頂点に徳川幕府のように各自治体を治める政府がある、という構造ですね。首都カーブルが動いても、各地方が動かないとアフガニスタンは変わらない。これが実態でございます。

さらにこれは一般的なことでありますけれども、貧富の差が激しい。ちょっとした病気で日本や東京やニューヨークに飛んで行ける人がいるかと思うと、一方で99.999%の人が数百円といわず数十円のお金がなくて死んでいく人が数しれない。こういう世界でございます。私たちの耳に届いてくるのは、簡単に外に出ていける人たちの声が多く、英語が流暢で、ものの考え方も私たちとよく似ていて、説得力があるような話しをする人たち、こういう人たちの話が届きやすい。私たちの長年の活動を通じて、99.999%の人たちは何を考えているのか。やはりこの雲の上の、外国人と接する人たちとは全く違う考えをしている、ということは知られていないと思います。私たちとしましては、いかに少ないお金で、いかに多くの人々に恩恵を及ぼすかという、特別な配慮をせざるを得ない世界であるということですね。

私の活動は1984年、JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）からペシャワールのミッション病院のらい病棟に派遣されたことから始まりました。私の最初の任務は、当時登録されておりました2,400名の患者に対して、医療センターを充実させよということでした。行ってびっくり、この二千数百名の患者に対して、ベッド数は16床、この写真〔スライド〕にありますように、これが当時すべての医療機械でございます。ハンセン病の話は今日詳しくはしませんけれども、単に薬があれば治るということではなくて、いろんなケアが必要なんですね。整形外科、内科、皮膚科、神経科、リハビリテーションも含めて、総合的なケアが必要ですけども、これではとても治療できる状況ではありませんでした。押すと倒れる台が1台、足が1本折れているんですね。耳にはめると怪我をする聴診器が1本、ねじれたピンセットが数本。医療はモノや金ではないという人

はたくさんいますけども、モノや金だけではないというのは正しいと思いますが、なんがなんでもこれは酷すぎるということで、ペシャワール会の活動が活発化しました。

20年を経た現在、病院が建ち替わりハンセン病計画も潰れた。というのはですね、このハンセン病もアフガン問題と同じで、話題になる時は人もモノも金もWHOが一声かければバーっと集まりますけども、ひとたび関心が薄れますと、皆さ一つと引いていく。その一方で、ハンセン病は増えつづける一方という状態は、少しも解消していない。周りを見渡してみますと、あちこちの団体が撤退して我々だけとなった。人がやらなきゃ我々がやらざるを得ないだろうということで、このハンセン病診療というのは、この病院の診療の要になっておりまして、ずいぶん20年をかけて改善されました。こういう写真〔スライド〕を見ますと、たしかに私が医者で立派な医療活動をやっているように見えますけども、私たちのエネルギーのほとんどは、一見医療と関係ないところにずいぶんのエネルギーを注いできた訳でございます。

その一つは、地域の人々、また我々の立場から言いますと、相手である患者の気持ちをどう理解するかということなんですね。これはなんでもないようでありますけども案外大変なことで、日本でも患者の気持ちを理解できないがために医療訴訟が起きたり、とんでもないマニュアルだけで診療するようなことが起きている訳です。診療される方がどういうことで怒り、どういうことで悲しみ、どういうことが楽しいのかがわからないと、臨床医療は成り立たないですね。それを理解する二十数年だったと思います。たとえば、現地の女性の被り物に対しても、外国人の犯しやすい過ちと言いますのは、単に相異であるものを、善悪とか優劣の範疇に分けて考えてしまう。女性にこんな被り物をさせるのは野蛮だと、許すべからざる人権侵害だということで、地域の文化が糾弾される。これはいいものでも悪いものでもなくて、我々がメシを食ったり、味噌汁をすすったりするように、現地の人々にとっては普通の女性の外出着ですね。私たちとしては、本当に女性のことを心配するなら、あなたが連れて行って面倒をみてくださいと言いたい。そこでずっと継続して面倒をみざるを得ない家族や我々はどうしたらいいのか。とりあえず、その地域の文化、慣習に関しては、いいとか悪いとか優れているとか劣っているというものじゃなくて、好き嫌いはあるでしょうけども、地域の文化に則った形で活動を展開することを鉄則にしてきました。このために始めはこれだけは頼らざるを得ないだろうということで、日本から女性のワーカーがずいぶん送られてきた。彼女らの働きによりまして、今まで疎かにされてきた女性の診療が充実するようになりました。私たちとしましては、如何に相手を理解するか。なにも私たちは社会運動をして文化を変えてしまえということはない。そのまま受け入れて、それに則った形で、この制約

された状態の中で、患者に準備できる最大のもの、最大の幸せの状態は何なのかを探って、それを準備する。それが医学の基本ではないかと、私は思っております。

私が参りました1984年は、アフガニスタン戦争の真っただ中。1979年の12月、私が赴任する5年前、当時世界最強の陸軍と呼ばれたソ連軍10万人が共産政権を擁護する名目で侵入しまして、その10年後、ソ連軍が撤退した。その間、人口の十分の一に相当する200万人が死亡し、さらに600万人が国外に逃れる、難民化すると、最悪の事態になったのです。パキスタンに300万人の難民が流れ込んでくる。それも先ほど言ったように、パキスタンの北西辺境州には同じ民族、言語の人たちが住んでいまして、難民というより民族移動に近い。親族を頼って続々と難民化する事態となった。私たちも医療の立場から、勢いこれに飲み込まれていったわけでございます。

はじめは難民キャンプで診療を続けておりましたがけれども、私たちはここで方針を大転換した。ハンセン病だけを見る診療は現地では成り立たない。例を挙げますと、大変な病気にかかったある患者に、「かかってよかった」と言われて、なぜかという、普通の病気ではこんなところまで運ばれない、ただで飯を食え、医者に診療してもらって幸せだということを知りました。まさにその通りだと思いました。ハンセン病だけを見るというのは、現地では絶対にできない。ハンセン病が多いところは、同時にほかの伝染病も多い。腸チフス、結核、マラリア、デング熱、アメーバ赤痢、ありとあらゆる伝染病の巣窟でありまして、あなたはハンセン病じゃないから診ませんとは、死にかけているマラリア患者には言えないですね。患者はたいていアフガニスタンの山奥の貧しい村の出身でして、ハンセン病多発地帯は同時にほかの感染症多発地帯でして、かつ医療機関はほとんどないというところでもありますから、将来的に、本格的にこのハンセン病の患者を減らすためには、アフガニスタンの山奥に診療所を開きまして、一般の病気も見ながら、ハンセン病の患者も伝染病の一つとして特別扱いせずさりげなく診ると。こうやって偏見も避けよう。このハンセン病の診療と同時に、アフガニスタンの農村部におけるモデル診療の確立ということも、もう一つの柱とするようになりました。

そのために1986、1987年ごろから、らい多発地帯、すなわちアフガニスタンの山奥の診療所開設予定地だったんですけども、そこで信頼関係も深めていきました。当時内戦の真っ只中で、戦場は農村という中で、ずいぶん仲間も失いましたけれども、表むき国境は閉鎖されておりますけれども、アフガニスタンとパキスタンの2,400キロメートルの国境は絶対に閉鎖しきれない。決して私は頭は強くはありませんけれども、足だけは強いので、山から山へ、谷から谷へと渡りながら、地元の人々との交わりを深めていったわけでございます。

これ〔写真〕はヌーリスタンと呼ばれる最も高地に住む民族の居住地で、ペシャワールから徒歩とジープで片道一週間はかかった。しかし知っておいてほしいのは、こういうところがアフガニスタンの大部分を占める地域であるということ。道路のある方は、まだましな方であると。一時空爆中にですね、アフガニスタンはいかに惨めかとか、圧制が敷かれているとか、テレビが禁止されているとか、タリバン政権によって言論統制されているとか、一般的な理解として日本でもまかり通っていました。私に言わせれば、第一電気がないのにどうやってテレビを見るの？と（会場 笑）。テレビは高価なものですから、ほとんどの人は、たとえ電気が通ってもテレビは買えないですね。大都市も時間配電で、地域の大体2、3%の人しか電気を利用できない。こういうこともあまり伝わらなかったわけですね。皆がデモクラシーだの、民主化だの言っているとき、人々はこういうところで貧しい生活をしとったわけでございます。

この村〔写真〕に行ったときに、私はすごく歓迎されまして、「フランス人ですか」って聞かれたんですね。村長さんが言うには、「あなたがこの村にやってきた最初の外国人だ」と。今まで中国人か日本人かという質問はありましたけれども、フランス人かと聞かれたのは生まれて初めてですね（会場 笑）。後で知りましたが、実は私がこの村にやってきた最初の外国人。村長さんがたまたまフランスという国を知っていたので聞いてみると、日本人ですというと、手のひらを返したように親切になる。そのわけも後で知りましたが、とにかく単に日本人というだけでもって、半分外国人でないような扱いをしてくれた。そのために、命拾いをしたことは数知れなかったし、そのために、仕事がうまくいったこともたくさんあったわけですね。今日のタイトルは「平和をつくる」ということですが、それを考えますと、最近では対日感情がだんだん悪くなってきました。私たちは顔見知りですからいいですけども、単に日本人であるがために攻撃の対象になることも、少しずつ一般化しつつある、ということも知っておいてもいいんじゃないかと思います。

1986年になって、ソ連軍が撤退を開始します。翌年この撤退が完了しますけれども、当時世界中に報道されまして、アフガン空爆の時以上に世界中で騒がれました。世界中から多くの団体が入ってきて、さあ難民が帰ってきてアフガニスタン復興が始まると、華々しく始まりましたけれども、それが91年になって湾岸戦争が始まると、関係援助団体は本当に逃げ足が早いですね。あっという間に消えてしまった。これによって帰った難民はほとんどいなかった。これによってアフガニスタン難民は、外国人に対する不信を決定的にするわけでございます。外国にとっては危険地帯だから行くなという。しかし本人たちにとっては、来てほしいというのに来ない。地元の人たちの声を代弁し

て言うならば、外国団体というのはどうせ新聞記者と一緒にやってきて、新聞記者と一緒に去っていくのさと。結局自分たちのことは自分でしなくちゃいけない、というのが99%の人々の声でありまして。皮肉なことに翌92年になって、共産政権が倒れますと、当時地方に散らばっていた政治党派、アメリカの武器援助で太っておった反ソ連軍のゲリラ組織が、今日の都カブルを目指して続々と攻め登った。そのため町の人には気の毒ですけれども、農村は平和になり、兵力が集中したカブルをはじめとする大都市が戦場になるという事態になって、大部分が農民でありましたアフガニスタン難民たちが、自分たちで一斉に故郷を目指しはじめたのが1992年の5月。なんとこの92年の5月から同じ年の12月までのわずか7か月の間に、UNHCRの発表によりますと、当時おりました270万人のアフガニスタンの難民のうち、200万人がほぼ独力で帰ったと、伝えられました。これによってですね、結局、自分たちのことは自分たちでしなくちゃいかんというのが、当時の一般的なアフガニスタン人の感覚だったと思います。

私たちもですね、この難民が帰ってくると、診療所を次々と開設しはじめて、今休止になった診療所は二つありますけれども、今の診療所はすべてその当時作られたものであります。そうこうする内に15年経ちまして、こりゃあ先が長いと。日本のハンセン病問題でも、一世紀以上の時間がかかっておりますから、まして外国人がぱっとあんなところにいって、調査するだけでも何年もかかるところで、いわゆる研究活動やらボランティアで何か月間だけではおさまらないだろうというのは、私たちの基本的な観念であります。誰でもいいからともかく、馬鹿みたいに、一つのことを追いつづける、ハンセン病の診療施設が地元にいるんだということで、15周年を機会に、ペシャワールに社会福祉法人として土着化すると。PMS（ペシャワール会医療サービス）という機関をですね、単にペシャワール会の出先機関というのではなくて、現地の活動母体として自前の病院、自前の現地組織として、現地に根を降ろして活動する団体となったわけでございます。

これからというときに、アフガニスタンというのは本当に運が悪い、襲ったのは世紀の大干ばつ、これもほとんど皆さんに知らされてませんでしたけれども、先ほどお見せしました山の雪がしだいに消えていく。実は十数年前からこの現象は起きておりましたけれども、気候があつたかくなってきたために、春先にそれまで少しずつ溶けてきた雪が急激に溶けだします。洪水は増えたけれども、干ばつも増大する。これが一挙に露わになったのは2000年の末のことでありまして、当時WHO世界保健機関の発表した数は危機迫るものがあった。現在進行しているユーラシア大陸の大干ばつは人類が至上体験したことのないようなもので、その中で最も激的な被害を受けたのはアフガニスタン。

人口の半分を上回る 1,200 万人が被災して、500 万人が飢餓線上、ごはんが食べられないということですね。さらに 100 万人が餓死線上にあると、もうすぐ死ぬということですね。と呼びかけをしたけども、当時これに応じた国際団体はほとんどなかったということは知っていただきたい。政治問題はとやかく言われるけれども、人々の命の根幹を握る食糧、食べ物にかかわること、水にかかわること、環境問題、これはほとんどこの、グローバリズムだの国際主義だのと言ってですね、地球上、皆仲良くしなきゃという世界の中で、こんな人の命を握るようなことは、大きな話題として今まで取り上げられなかった。ということに私は非常に憤りを持っています。当時 2000 年の春以降、診療所の周りから、本当に村が次々と消えていく。当時の、これも WHO の発表によりますと、家畜の 9 割が死滅するという状態でありまして、人々は家畜が死ぬ前に、家畜もお金になりますから、町に持って行って売る、村を離れて親戚のところにも身を寄せる、さらにパキスタンやイランに難民となって逃れるという難民が続出しました。これは未だに続いていることを私は今日、強調したいと思います。アフガン空爆で、デモクラシーと自由がやってきたから、皆の暮らしが楽になったと、絶対にそんなことはない。この干ばつ対策が行われない限り、この難民化というのは続く。その証拠に、2001 年の 10 月になって、アフガン空爆が行われ、翌年の 2002 年のアフガン復興東京会議でもって、教育支援だの、自由とデモクラシーをもたらして、アフガニスタン国民の幸せになったと。何となくこのいかがわしい錯覚が世界中で通用する。私たちが始めから言っていたのは、難民というのは、食えなくなって逃げてきた農民たちなんだと言いましたけれども、それはほとんど受け入れられなかった。しかしそれは今でも続いておると、声を大にして強調したいと思います。何よりも UNHCR、国連難民高等弁務官事務所の数字が雄弁に物語っている。2002 年の東京復興会議の後、パキスタンの 200 万人の難民のうち、一年間で 140 万人が帰したと言った。200 万人引く 140 万人は 60 万人のはず。ところが、昨年夏発表された UNHCR の発表は、さらに 300 万人の難民がいるのでまた帰還計画を立てると。毎年何百万人を帰してなぜゼロにならないのかと。この問題は調べてないということなんですね。それは意図的なものなのか、たまたま無頓着なせいかは知りませんが、実態はこの砂漠化というのは少しもおさまっていない、ということに皆に訴えたいと思います。

ともかくこの餓死の末期といいますのはですね、飢え、餓死といいますけれども、高齢の方はご存知かもしれないけれども、敗戦直後のあの日本。お腹がぺこぺこで路上でばったりゆきだおれになるというような餓死は案外少ない。末期というのは大抵この栄養失調にかかりまして、抵抗力が弱くなると。そこに簡単な下痢症。大抵水がないと、

生活排水、汚い水も飲んでしまう。そうすると、子どもは簡単に赤痢になってころりと逝ってしまう。これが大体多かった。私たちとしては診ても診ても、次々と子どもの犠牲者があらわれる。ときには何日も歩いて若いお母さんたちが、小さい子どもをしっかりと胸に抱えてやってくる。まだ診療所にたどり着く方はいい方で、たどり着いても外来で待っている間に、子供がお母さんの腕の中で冷えていく光景は普通に見られています。

私たちとしては、抗生物質を 100 万人分準備するよりも、井戸一本の方がまだましだということで、残った村人たちを集めて、診療所付近で井戸を掘りました。これは現在も活動を続けております。現在は約 1,400 本の飲料用水源を確保して、三十数万人の村人がですね、少なくとも自分の村で暮らせるという状態を作っております。

〔写真〕続いてこれは伝統的な灌漑用水路である、カレードと呼ばれるものです。要するに、地下水を利用した灌漑用水路ですけれども、飲み水だけでは食ってはいけませんので、ほとんどは農民、農村社会の中でまず自分で耕せる灌漑用水の確保をします。狭い地域でありますけれども、力を尽くしました。

〔写真〕これは 2000 年 9 月 15 日、私の誕生日ですからよく覚えています。これが診療所付近の様子でありまして、2、3 年前まで緑豊かな水田地帯であったことを思わせる形跡はありませんでした。こういうところに、早めに用水路の水を注いであげますと、どうなるかといいますとこの 7 か月後。〔写真〕これは同じ地域ですね、違うところを撮ってるじゃないかと言われました。まさしく同じところでありまして、私たちが哀れな難民のために助けてあげなければという以前に、そこで人々が自分たちで暮らせる条件を整えますと、自然に難民は帰ってくる。診療所周辺約 1 万人の住人は自発的に帰ったものでございます。こうやって、私たちは灌漑井戸を掘ったり用水路を掘ったりしながら、始めから砂漠であったのではなくて、豊かな田園が砂漠化した地域に緑に回復をするという仕事が進められておりまして、私たちは農業用水路の確保にも力を注ぎました。

私たちが期待していたのは、こういう悲惨な状況が世界で話題にならないはずがないと。誰も帰らなかった難民帰還援助でも、たくさんの団体が押し寄せたくらいですから。どこか大きな団体、国際援助が来るだろうと思ってたら来たのは援助ではなくて、国連の戦車。2001 年の 2 月、前年のペルシャ湾岸の自爆テロで、米軍の駆逐艦が大破するという事件がありまして、これに対する報復措置として、ロシアとアメリカが音頭をとりまして、アフガン制裁を決定する。会場の皆さんがお腹がペコペコというときに、この中で犯罪者が紛れこんでるんで会場を閉めます、水も食べ物もあげません、というふうになったらどうなるのか。国民にとってわけわからないのに、何で俺たちがやらなく

ちやいけないのかという思いが強くなってくる。この周りで 100 万人が死ぬという中で、食糧まで制裁しようとした。というのは人々にとって忘れ難い思い出となりました。

さらに、9月11日のニューヨークのテロ事件によりまして、翌日からアフガン空爆ということが言われます。普通の人には何のこともよくわからない。ビン・ラディンという名前は有名でしたけれども、アフガニスタンは保守的な国でありまして、国際運動とはほとんど関係がない人たちばかり。しかも大干ばつのまっただ中。難民になれる人はまだまして、カーブルは明日の米をどうすりゃええかという人たちが溢れかえっておった。そこに爆弾が降り注がれた、ということは皆さん思い起こして知っておいていいことだと思います。あの当時ですね、ピンポイント攻撃だの、テロリストだけを倒す人道的な爆弾だの、軍事評論家が事もあろうにまともに議論をすると、日本がこれにおおきく巻き込まれたことは、私にとっては非常に残念なことでございます。ともかく私たちとしては、戦争どころじゃないんだと、みんな明日の米をどうするかで困ってるんだと。今空爆が始まったらカーブル市民の1割は生きて冬を越せないだろうということで、1,850 トンの小麦を送りました。飢えた人々、死にかけた人々、十数万に対して冬を越すための食料が届けられたのは、嘘のような本当の話でございます。

次に、自由とデモクラシーの勝利。タリバン政権が消滅いたしまして、米軍に支援された北部同盟軍と米軍が入ってくる。繰り返し繰り返しもう止めてくれと思うほど流された映像が、この米軍を解放軍として歓呼の声で迎えるカーブル市民の様子が、嫌というほど流される。地元には我々自身もですね、どんな敵が来るか分からないときに、旗を3つくらい持ってるんですね（会場 笑）。ロシア軍が来ればロシアの旗、米軍が来れば米軍の旗、要するにあなた達とは銃火を交えたくありません、というただの意思表示にすぎなかった。それが歓呼の声で迎えるカーブル市民達という映像として流された。ブルカを脱ぐ女性達、自由の象徴、女性解放。しかしそれならなぜソ連を助けなかったのか。ソ連も同じことをやって失敗したじゃないか。ということが暴力的な形で再びやられたということについて、一般の庶民であります農民達は冷ややかな目で見ているのが実情でございました。いろんなものが解放されまして、[写真]これはケシ畑でありますけれども、いまやアフガニスタンはほぼ消滅に近かった麻薬栽培が、タリバン政権の崩壊後、世界の麻薬の9割以上を供給するという不名誉な地位に転落しました。解放されたのは麻薬栽培の自由。女性がブルカを脱いでもいい自由も解放されましたけれども、脱ぐ人はほとんどいなかった。実際に増えたのは女性が物乞いをして食っていく姿。あるいは、女性が売春をする自由が増えた。そして、あの保守的なイスラム社会で、西洋的な肌を露出した風俗が首都カーブルで行われるとなると、昔の古き良きアフガニス

タンを知っている人にとっては面白くないという事態が頻発しております。そのため爆撃、爆破事件が絶えないという自体になっております。ちなみに昨年アメリカ兵の犠牲者だけで、100人以上がアフガニスタンで殺害されました。さらに地元の米軍協力者の人々は、その10倍以上が死亡しておるといことは、皆さんおそらくご存じないと思います。これが自由とデモクラシーの結末であったと、皆さん多少は知っておかれてもいいじゃなかろうかなと思います。私たちとしましては、ロシアが来て帰って行ったじゃないか、その後いろんな党派が来て支配したけど潰れたじゃないか、だからアメリカもそうなるんじゃないか。カールがどうなろうと我々のスタンスに変わりはないということ、住民達に再び説きまして活動を継続してきたのであります。

アフガニスタンは農業国家でありまして、自給自足できる農村の回復、すなわち昔のアフガニスタンを回復したい。アフガニスタンの食料自給率は、100%近かった過去の時代もありましたが、昨年の統計では60%に落ち込みまして。さらに今年はずね、雨が降らない雪が降らない暖かいと、異常気象が続いております、小麦の大凶作が予想される。おそらく食糧自給率は半分以下に落ちるだろうと言われております。その中でまず食っていくことが先なんだということで、試験農場、これは乾燥に強い作付けでして、現在は3年たった今、サツマイモが割といけるとい感触をつかんでおります。そして牛の飼料の研究でソルゴ、アルファルファを広めたいと今やっております。また、お茶にも手をつけて、麻薬が小麦の約100倍の値段で取引されるので、貧しい農民達はい麻薬を作ってしまうのです。それに代わるものとしてお茶の栽培を広めつつあります。

これは元々砂漠ではなくて、3年前の写真ですが、元々多少は水があって畑だったところが、今は砂漠みたいになっています。こういう所を再び農地にして、井戸だけでは足りないので、総工費8億円をかけまして14キロメートルの水路の建設に取りかかったのが3年前。現在はこの地域だけで約70町歩ありますけども、全域が水田と化しております。さらにその10倍に相当します700町歩が昨年の4月から水の恩恵を受けられるようになりまして、この用水路によって700ヘクタールが灌漑されるようになりました。さらにこの水路が完成いたしますと、この7、8倍、上手くいけば10倍近くを潤せるといこと。現在の私たちの活動は、医療はもちろん行いますけども、いかにしてみんなが生きていけるか、そのための水を取り戻す、この荒れ野を緑に変えることをもって一番の大きな事業としております。田中正造ではありませんけども、

うっかり眺めておればただの原野
涙を以て眺めれば難民達の群れ
氣力を以て見れば竹槍
臆病を以て見ればただ病氣のみ、

(以上の毒野も、うかと見れば普通の原野なり。涙を以て見れば地獄の餓鬼のみ。
氣力を以て見れば竹槍。臆病を以て見れば疾病のみ——田中正造【編集者注】)。

という状態でありまして、私たちは竹槍は使えませんけれども、向こうの人は非常に現実的で事実しか信じませんので、とにかくこの荒野を緑化することによって我々の力としようということで、事業を展開しております。

〔写真〕今、丁度この現場に取りかかっているところでありまして、もうすぐ目的地まで着きますと、約5,000ヘクタールの灌漑が可能になります。その際に気をつけなくちゃいけないのは、地元の人でも維持できるようなものということです。〔写真〕これは小さいですけども、単に盛り土をして樹を植えて、柳の木が多いですね、それで地面を保護する。これだと決壊しても、土嚢を積み上げて柳の木を挿せばそれで出来上がりです。日本みたいなコンクリート固めにしてしまうと、それは修繕するのも大変だと、地元の人が自分で管理できないということです。出来るだけ地元の人たちが自分達の手で管理出来るものを、というのを一つのコンセプトにしています。

その際、役に立ったと思われるのが日本の農業土木技術、と申しまして近代的な大金をはたいて作ったコンクリート施設ではなくて、江戸時代、戦国時代から行われてきた日本の農業土木技術でございます。〔写真〕これはですね、九州は筑後川、筑後川は朝倉郡の山田堰というところがありますが、この現場の斜めの取水口は、山田堰のコピーでありまして。これによって、春夏秋冬一定した水量の治水が可能となりまして、昨年の大洪水でほとんどの川沿いの取水口が壊滅する中で、我々の水路だけが生き残って、これは日本の農業土木技術は素晴らしいものだと思います。

〔写真〕さらに蛇籠。これは最近日本でも少し見直されております。日本では昔の川への郷愁から、多様な生物が住める環境を作るため使用されておりますが、元来これは、コンクリート仕事よりも安くて丈夫なんですね。この護岸のために蛇籠を使用いたしまして、今まで約350トンのワイヤーで、一万個以上の蛇籠が生産されました。

〔写真〕これは取水口で、基本的に激しい流れが当たるところは、現在もすべて蛇籠にしております。土木作業員などをしております。医者の仕事はあまりしなくなりまし

た（会場 笑）。

〔写真〕米軍が通っていきます。私たちの活動地は米軍の軍事活動地域でもありまして、道路会社の人々が、兵隊に物々しく守られてこの道路、米軍の軍用道路に近い道路ですね、の工事をしておる。私は丸腰ですけれども、一回も地元の人から攻撃を受けたことはない。時々米軍が機銃掃射を我々にして通っていく。抗議いたしますと、「我々は気が立ってるんだ」と「怪しい者を見つけたら攻撃をしてから確認をするんだ」と言うんですね。それは逆じゃないかと、確認してから攻撃しないと誤爆になるんじゃないかと、日本大使館に抗議の声を出したことがありましたけれども、それは握りつぶされました。まあともかく私たちとしては、今日はいみじくも「平和をつくる」というのがタイトルですけれども、平和は武力によっては達成されないというのが、私たちの確信でもございます。

実際、道路工事をしておった請負の外国人が今まで何人殺されたか。トルコの会社だけで十数名が誘拐、殺戮された。これは米軍の手先とみなされたということで、さらに、撤退いたしましたトルコ系の会社からインド系の会社に代わりまして、この半年間の内に、私が覚えているだけで3件の誘拐事件がありまして、いずれも死体となって見つかっております。その中で我々はあんなに何でもなくやってるけれども、武力に守られる支援というのはあり得ないんだというのが、私の現地にいるの実感でございます。

〔写真〕こういう綺麗な石組みをするのは、実は技術者でも何でもなくて、周囲の農民達そのものなんですね。この水路は、決して進んだ国の進んだ技術で、高度の技術を使って出来上がったものでない。その辺に誰でもいるようなお百姓さんたちが、彼らは石組みが日常ですから、石組みの芸術家でもある。さらに、この運転手は技術者でもあるということで、こういう人たちと立派な水路が出来るということを、一つの誇りとしたしております。

〔写真〕これは昨年の写真ですが、2年経ちますと、柳というのは不思議な樹で、護岸に植えた柳の根っこが、本当に絨毯のように川底を覆うんですね。水路が崩れましても、柳が針金の代わりになってしっかりと石を支えてくれるということで、おそらく100年はもつんじゃないかと、私たちは思っております。〔写真〕天災、人災といろいろありましたけれども、川の流れが変わって決壊しそうになったときに、護岸をせざるを得なくなりまして。これも日本の技術で、石出し、水制という技術で、これでかろうじて川を守ったということもありました。

〔写真〕これも八代の十連樋門のコピーですね。こうやって、もちろん現地にはないものも取り入れましたが、大抵は300年、400年前の日本の農業土木技術でありまし

て。私は、日本というのは進んだ国だなど、進んでた国だなど、改めて思っております。

〔写真〕これは、水道橋ですね。〔写真〕こうやって元の砂漠地帯が次々と緑化していくということは、これは非常に見ていて楽しいものなんですね。〔写真〕ここは、元は原野でした。今年の4月になってやっとこの原野一帯に水を通せるようになりまして、現在はこの麦畑で埋め尽くされておりまして、ここから見渡す限りの麦畑が広がっています。

出来ないことではない。出来ないもんじゃないのに、なぜやらないのか？という素朴な疑問でありまして。世界食糧計画という直接難民に携わっておる国連機関が、これを知らないはずはない。8億円といったって、我々にとっては大金ですけども、国家間援助に比べれば雀の涙なんです。それでなぜこのような事業が出来ないのかということの背景に、この先進国側の勝手な考え方、あるいは自分たちの都合が優先して相手を考えてない、という驕りを見ないわけにはいかない訳でございます。私たちとしては気力を以てこの原野を見ますけれども、実際にこの原野を豊かな緑野と変えまして、これを以て我々の竹槍とする。これを私たちの力にしたいと思っております。

〔写真〕悲惨なことばかりを申しましたけれども、いつも講演の締めくくりでお見せするのは、この一枚の写真。みんな暗い顔をして憂鬱な事ばかり起きているのかというと、確かに話を聞けば、誰それが飢え死にしただの戦死しただの、暗い話が多ございますけれども、現地に現在20名ほどのワーカーが助っ人に行っていますけども、日本から来ているワーカーの方が暗い顔をしているんですよ。「この哀れな人たちを救ってやらねば」と。一方、現地の人、特に子供は明るく、生き生きとしているんですね。この差はなんなのか？と日本に帰って思いますのは、人々の顔がなにか暗くて空虚なんですよね。なんでそんなに元気がないのか？と。日本も経済不況でどうのこうの、結構大変なんだと。ああ大変だな、食いものは食えないのか？とか、餓死者は何万人出たんだ？と言うと、餓死者はいないそうですね。その代わり自殺者は35,000人以上出るという、奇々怪々な社会になった。

現地にいて20年を振り返って思いますのは、はじめの頃はですね、困っている人々に手を差し伸べなければ、という思いあがった考えがなかった訳ではありませんけれども、振り返ってみますと、良かったな、と。日本にいる皆様には気の毒ですけども、この日本にいないで、現地に行って良かったなど、思うんですね。皆とは言いませんけれども、少なくとも一般の日本人が暗い顔をしている中で、私だけはそれから自由である。助けるつもりが、逆に助かったような気がして嬉しい。人間は、この最後の最後まで、食べ物も何もない、ないない尽くしの中でも人間は生きていける。その強さと同時に、最後まで失っちゃいけないものは何なのか、これは無くたっていいんじゃないか、と

いうものは何なのかということについて、一つの認識を得たような気がして、私は現地で働けたことに非常に感謝しております。

少なくとも今世界を覆っておる一つの迷信、金さえあれば何でもできるという迷信、武器さえあれば身は守られるという迷信。この迷信から、私たちは自由であります。こうやって、私たちがこの事業を通じまして、平和とは何なのか、人が本当に幸せに生きていくこととは何なのかというのを、竹槍などという物騒なものではなくて、荒野を緑野に変えることを実現いたしまして、私たちの竹槍にしたいと思っております。話が長くなりましたが、一応、私の話をこれで終わらせていただきます。どうも、ご清聴ありがとうございました。

《以下、質疑応答》

——素朴な質問ですが、水を引いて土地を潤すだけで、肥料は要らないんですか？

肥料は、向こうは買うお金がないですね。堆肥はある程度作れますけども、肥料はあまり使わない農業です。かろうじて窒素肥料が時々手に入るという程度で、それでも世界で一番大きなスイカが出来たり。やっぱり土地の条件が無機質だけではないのでしょうね。さらに、水路に密生して落葉樹を植えますと、その落葉樹が有機物を生産したりして、決してただの泥ではないな、という感じがしております。日本では有機栽培をするとかえって費用が高くなるそうですけれども、向こうでは肥料を買うお金がないので全部が有機栽培です。だから便所もないですね。というのは、日本も昔はそうでしたけども、人糞というのは貴重な肥料なんですね。そういうことで、特に肥料らしいものといえば堆肥、それから、牛馬の糞は燃料に使うので、人糞が主な肥料になりますかね。なんでも結構ですので、怒りませんので、質問してください。

——現地にいるといろいろなアイデアが湧いてくるのだろうかと思いながら聞いていました。たとえば現地での日本人の話し合いから出てくるのか、どうやって土木技術のアイデアが出てくるのでしょうか。

大抵は日本の、それも九州の私の家の近くで見た水利施設、これがネタです。

——中村さんの今までの知識があつて、それが活かされているのでしょうか。

というよりはもう、この用水路工事が始まって、まず自分の子どもの頃を思い出しまして。たとえば、海へ泳いでいけたこと。うちの周りは堤がいっぱいあるんですね。堤

で泳いだことはあるけれども作ったことはないな、ということで見に行ったりとか。あるいは、昔からある山田堰だとか八代の十連樋門、緑川の通潤橋…みんな九州ですよ。しかも、原型らしきものは現地にもあるんですね。なるほど、こうやって作ったなら納得ということで、簡単にいうと模倣するという形で、現地の人も納得、という形で技術移転が行われました。

さらに、現地の素材をどうやって生かすかという工夫もしてきたのですが、現地には石材は無限にあります。大きな岩から小さな砂利まで、タダで手に入る。その辺を掘れば、立派な土が出てくる。ただ日本と土質が違いまして、これをどうするかということで、細かい工夫はたくさんありましたけれども、ほぼ地元の素材を生かして、日本の技術と地元の技術をミックスして作った、ということでございます。若い人によく言いますが、勉強しすぎちゃいかんと。子どもの頃に遊びまわった経験、適当に野山を駆け巡って遊びまわっていた経験が、いま活かされているというのが本当でしょうね。

——世界にはアジアやアフリカでも支援を必要とする場所や人がたくさんあるなか、中村さんがあえてペシャワール地区に入っていかれたきっかけを聞かせてください。

これも、いつも出される良い質問で、「なぜアフガニスタンだけに集中するのか？」これは、本当は日本でもよかったんですね。めぐり逢いだとか、出会いだとか、古い日本の言葉で「縁」というものでありまして。たとえばですね、うちの患者が死ぬのと自分の子どもが死ぬのと、悲しさが違う。それだけの親密感というのは、私がアレンジしたもんじゃなくて、キリスト教的な言い方をすればですね、神様が与えてくれた一つの人間と人間の関係なんですね。その中で私たちは生きているわけで、このつながりを大切に、という以上のことはないです。たまたまこれがアフリカだったらどうなった？とか、おそらくそこに留まっていたでしょうね。日本だったらどうなのか。日本にいたでしょうね。例えば、ご結婚なさっていると思いますが、世の中は半分が女性で半分が男性であります。なぜその人があなたの奥さんでないといけないのか。これは考えてみたら分からないわけで、神様がそう出会わされたとしか言いようがないわけですね。それをやはり中心に、大切にしていって、というのが現地ばかり力を入れるということになるんでしょうね。

私たちは国際医療協力の見本のように言われますけれども、決してそういうことはない。私は九州の北半分とアフガニスタンの東部しか知らなくて、それでいいじゃないかと私は思っています。一般的に人類を愛するために、世界中を救うことができるのか？私はそれはできないと思うんですね。かえってお節介。人類を、全世界を救うために爆

弾を落とす、全世界を救うために金をまき散らす、ということ以上にはできない。この国際協力のすべてが悪いとは思いませんけれども、そこに欠けてあるのは、そこに張り付いてじっと人々の生活を下の方から眺めて、そこで人々がどんなことで悲しみ、どんなことで喜ぶのか、その生き様を共にすることではないかと、私は思っております。

なぜアフガニスタンなのかというのは、さしたる理由はありません。私もよくわかりません。できたら家内が言う様に、「あげんところは早よう帰って来て、日本で勤務しとった方がまし」だなど、思わないでもありませんけれども、目の前にいろんなことがあってですね、自分に何もできなければ別ですけれども、多少は打つ手があるのに、そこを放棄して出てくるのは、簡単に言うと「それでは男が廃るよ」と。この日本人としての気概、それ以外のものではない。いずれも非論理的な話で納得いかないと思いますが、動機は単純でございます。

——アフガニスタンから見て、今の日本に欠けるものはありますか？

これはですね、自分が欠けてるからよく分かりませんが。向こうと比べてまず欠けているのは、あったかい人間関係ですね。そのあったかい人間関係の中で、子供の生き生きとした笑顔も育ってくる。これがない。しかし、私たちの世代が幸せに思うのは、私たちは昔の日本の面影の残りかすを食って育った、ということに感謝しております。世の中が複雑になればなるほど、いわゆる個人主義が徹底すればするほど、個人主義が悪いとは言いませんけれども、自分のことさえよければいいという風潮がどこか蔓延った。向こうの人だって、皆自分のことが可愛くはあるけれども、困っている人がいたら恵んでやるのが当たり前。こういう世界なんですね。自分がごはんを食べて、人がご飯を食べてないのは、彼らは見ていて居たたまれない。通りがかりの人でも、「おい一緒に食べろ」と。こうやって、おいしいところだけ見れば、相互扶助が非常に徹底した社会。日本の個人主義の行きつく先の社会と比べると、私はなんとなく、日本はマニュアル的で冷たい感じがするんですね。みんな紳士的で上品で小綺麗にはなったけれども、冷たくていじめも増えておると、陰湿さが増しておるという感じが、皆じゃなくて、あなたが悪いと言ってるわけじゃなくて、私も含めまして日本人がだんだん人間らしさから退化していつておるといのは、言ってもいいんじゃないかならうかと思えます。

改革、改革と言って、改革した挙句がまた新しいマニュアルをこさえて、ますます窮屈になっていく。政治家自身を見ていてわかる様に、国民の命を守ることではなくて、だんだん守らない方に行っている。こんな窮屈な国はないと私は個人的に思っております。そういうことを言いますと募金が減りますので、言いませんけども（会場

笑)。私はいずれ破綻が来るんじゃないかと思います。その証拠に、この人間関係の破綻によって若い人たちの行き場が失われて、そのためにこれだけの新興宗教が生まれた。

うちのワーカー、約 20 名の若者たちが現場で毎年汗を流していますけども、はじめは「大丈夫かな？こんなマザコンの塊のような青年に何が出来るのか」と思ったら、半年も経たないうちに苦虫を嘔み潰したようないい男になってきて、男らしくなってくるんですね。そうしてみると、今の若いもんはと言うてるけれども、それを作り出したのは大人だよって。環境あるいは社会が悪いか個人が悪いか、という話は昔からありますけれども、明らかに社会が悪い。置かれた環境によっては若い方も光る、ということを考えますと、そのあたりに今おっしゃった、今欠けているものが見えてくるんじゃないかな、という気がするんですね。その一つに、教育信仰というのもありまして、平均点がよければ、偏差値が良ければ、人間として優れておるような錯覚、迷信、これも取りのけなくちゃいけないものの一つじゃないかと思いますね。

決して、勉強がよく出来るからといって良い人間になるとは限りません。その証拠に、私たちが接する中で一番金にきたないのは、教育を受けた人たち。医者、まあ自分が医者ですから悪く言えませんけれども(会場 笑)、それから技師、こういった人はですね、良い待遇を受けて当然だということで、不平を募らす。一方、普通の百姓、運転手と呼ばれる人たちは、感謝してそれを受け止めた。ということを考えますと、教育がないということは良くないことですけれども、変にありすぎるのも良くないんじゃないかと。それでもって人の価値は定まらないというのが、現地で得た認識の一つでございます。答えになるか分かりませんが、私の実感としては、現地で働く若者たちの目を見張るような変化、その辺りにですね、日本に欠けているものが見えてくるんじゃないかなと、こう思うわけでございます。これでよろしいでしょうか。

2006年3月4日(土)

九州大学 YMCA100 周年記念会にて

